

修竹堂集

東坡先生集

修竹堂集

全一

酒竹
2305

門
冊
圖 架 列
2305 冊
備考
(編文庫研究部)

新加坡大學圖書館	
N	A 00
酒 竹	
2305	

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4 5

錦地——さるの音凍——音柱
尾のさるい踊り
吉水

明子，旅行記

日盤古福之少只一雲此乃金

信光は、ふたつをばらして

浦人磨石

雪のあしをいかに
歌

[illegible]

大德

海石名のうろやろろ 夏のまき
 はりてーー 詩の風 埋木

二日
 明
 上テ

不鳴

かぶ川わや、水まといふあり、なんか之偶
し、ふちて我里をたつ、ひまそ、ふ郡、ゆふ
裏まゝ、まづね、面をも、かき、そ、のれ、み
し

たつとまゝに——とあるが、これは涼——とあるが、水

ゆるゆる吉亭ノ物——とある

涼——とあるが、これは物のけや

ふ——とあるが、これは吉の——とある

吉亭

吉

吉

吉

二

吉

吉

吉

吉

吉

吉

吉

吉

吉

少車ハ硯石ノ一のハ
 小一さの袋とちね井口
 写しとて埋て地の名
 々ち小い地水のやうさ
 二
 ともありあき場中おちり
 けりさうなれぬハやま
 いそしき行もふねれぬハ
 浮世の塵ノとれぬ 何ぞ観

二

吉 吉 吉 吉 吉 吉 吉

怒り城ハ家の杖一折れ先
 高橋と主国とちね井口
 一ツとて地のけりあき西仇賣
 けりくおけじ秋の川
 素壁と大和山落すすきと
 ちね井口地水のやうさ
 袴つとて埋て地の名
 荷奈ハ水地の一とて

吉 吉 吉 吉 吉 吉 吉

晴るなりき候ふ作をせしめ
 そらつてゝ雨をこゝろすやうけ
 はむといふ雷のたじひのうきげ
 ありしかる然と知れぬこれ
 ちよとの美祿候ききうむ魚
 胡蝶やふまわすうすけ

高士亭記

明 書 明 明 書 書 明

R

といふ二日乃月のもろ秋
 萬葉の風のほし山如く
 田中一く龍泉の四五好
 萬葉の枝も如くぬかうと
 久しきなり業の口さば
 之味像の音涼一糸川魚
 にもいかにをいれあやう
 けり神々も龍うけえん遠サレ

明里明堂

後方のうみあゝまゝに
 はじまひのりゝまゝに
 朱物の小紋をきゝし隙をそ
 かゝればまゝまゝのいゝい
 と井ゝゝ一際ゝは枝のふ
 佛の辨ゝゝゝゝゝゝ
 目りゝゝゝゝゝゝゝゝ
 明日ゝゝゝゝゝゝゝゝ

やゝゝゝゝゝゝゝゝ

二六

町の横やゝゝゝゝゝゝ
 はねゝゝゝゝゝゝゝゝ
 大和ゝゝゝゝゝゝゝゝ
 けゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

やゝゝゝゝゝゝ

えゝゝゝのほゝゝゝゝゝゝゝゝ
 なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 ねゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かきい冠の白きしるはわたり物心
はあふる六のきとさう

唐人のうらなはわたりうす唐

辛うー休ふ柳花の新

草青じ中うー二葉花うしそ

鮎イ子うーはく親おうーも

好物のあふ喃う夜まの月

猛うううう花をううう唐

思諫

う

唐子

諫

柳子

七

うものいろがーも折ら御て

何まやうあわーはるれうう

ふとあふ唐屋も御うううう

たむぢいをうううううう

雲井唐あふ唐向成ううう

風うううううううううう

新田ふとれ思泉あ呼出され

壺うううう月の動強

唐

唐

諫

う

唐

諫

万路の歌なしてけるまゝとま
 あらうらやふあするものなり
 ほど一葉端一む切て出
 物せんをすう一葉の類い
 二
 今いけりての郷へ一の如
 と物の歌一葉のむじゆと
 遠慮かたなくふふやうとま
 田村の宮のはなと科 まれ

八
 詠 采 寔 寔 采 詠 寔 采 詠

うきほくさ萩の世のまん不
 賤のねほのりくむけうと
 何地へり両士の囂ふ帆立貝
 居去大く短歌の月
 竹の子の乳房とやけやまね
 くらげとやけやけの家
 見屋とやけやけの家
 水一萩とやけやけの家

采 詠 采 詠 采 詠 采 詠

風の静い夜 嘆きしもの宿
 生死のわかれ 静かなる心
 人さやうなはる 静かなる心
 金さやうなはる 静かなる心
 雲さやうなはる 静かなる心
 翠のまぶしき 静かなる心

静 閑 心 静 閑 心

賢人小片より 静かなる心 静かなる心
 自在なる心 静かなる心 静かなる心
 静かなる心 静かなる心 静かなる心

赤石天の静かなる心 静かなる心
 静かなる心 静かなる心 静かなる心
 静かなる心 静かなる心 静かなる心

石陽王見之 静かなる心 静かなる心

静かなる心 静かなる心 静かなる心
 静かなる心 静かなる心 静かなる心
 静かなる心 静かなる心 静かなる心

静 閑 心

うるはきの目いづれに入
 り物事のねはしむるに
 く留輪の年一袖のねは
 金箱一糸の氷柱の入り
 懺悔いけみぬけくさき 提
 世に提え定ぬれねえの南實
 玉一はちやうさなるてりわ
 傾き一はねとくふ口すけり

鳴 孫 鳴 孫

しこちるまの訪一はねく
 とねく腐敗しき一はねく
 藤一はね玉のまゝのつゝま
 れまのゆゑにねくハまのね
 ねのまゝのやまの黄昏
 はねくまゝのまゝのね
 らね指ねるまゝのね
 ねのねのまゝのね

鳴 孫 鳴 孫

孟冬之日秋藤氏一兩輩訪和田寺

於是忽情頻動作五言如志

時是小春天

步行寄和田 庭中殘菊咲

佳院見仁賢

同宿先生偶入和田之寺舍有佳作
不多而雖無由次芳韻魚目依泥明
珠之語敢答其高韻

吐出新詩映一天

文林學習年茂仁田

十二

秋中風骨與深宵

遠近仰瞻 国宅賢

和田寺光譽言行原和南信

あけくーたのらんらんやう人唐の秋中
すまゝと人の言はばすまゝと人の言はばすまゝと
たう神もまふもなやういふく流のあはれとくち
わね月すまゝといふまゝといふ

同じく秋中をりけ 石橋金佐末氏秋中

秋里のいといとやれあゆみのち

多うくわくくわく 柳の早咲

とふふとふふのけあふふふ

熱帯をふふふふのふふふ

ゆるゆるのふふふふふふ

えりふのふふふふふふ

思ふふふふふふふふふ

秋情ふふふふふふふ

秋中ふふふふふふふ

吟

南虎

吟

委級氏勝重

井田之彦橋良

流水

吟

七

拜 天沖之る像

更々第一林今古

流崎柳秋吟四内

玄春

爆竹声中韶節新

千戸和氣三陽日

題象碁

王將共強碁

石陽波積之境内田水月

遺像猶存天満宮

惣明高德及無窮

水月

青皇得暖殺朱唇

万戸伸心一歳春

飛角敗西東

勝利依忠起

金部氏實戰功

けと青内田氏作し言案の山より白虎の白虎
類を金部玉にけりけりけりけりけりけりけり

早物修常雄

晁術折西東

莫智世源外

使文鋒関功

青尾新仙

思い廻し誰のめくわりの月

のんきー雲部氏を起し

海水

十良

遠く山錦ふんりけりけりけり

一かきとけりけりけりけり

けりけりけりけりけりけりけり

世のわたりけりけりけりけり

なりけりけりけりけりけりけり

勞咳性けりけりけりけりけり

なりけりけりけりけりけりけり

金粟けりけりけりけりけりけり

井田氏

同吟

水月

水

以

井田氏

初佳

同氏

末佳

同氏

吟

頼賢

釣簾をわいひて新ありと花園
も通ふてむとあらねど

賢月

石陽井田といふ里小城なりふり頼實といふ
今よりうしろの境かまう小城なりかたし
おとしんけは武向といふとては草の原に
あふはれはとてあふはれとて銀山といふ
いれはとてとてあふはれとてとてとてとて
やう時きとてとてとてとてとてとてとて
まうたわとてとてとてとてとてとてとて
おかしとてとてとてとてとてとてとて
集りてとてとてとてとてとてとてとて

夢想

頼實

つゝとて馬をえりし月の影
夕代とつりてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとて
釣簾のかつてとてとてとてとて
石のつとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとて
おかしとてとてとてとてとてとて

水 明 風 佳 水 明

伊達ーかりしすものちやんぼ
 付しおのちよきふり 彼日
 あれ くる牛のつちあやけし
 御車いねのすふとほろも
 飛さるる月のせんほい
 今こい思ふ表すはねさ
 信し人ぬれささふ 多風
 賢い老翁いとそとね 修り

吟佳水明吟實

高野 多ねものゆき
 後 ーか ね ーの ね
 羽根もちーをゆかり
 ふと えてまの浦とふたさ
 楊花かゝる 興 ーの ね
 おい ま へん へに ぬき ぬき
 せ ぬき ぬき ぬき
 高野の ぬき ぬき ぬき

高野 水 佳 吟 水 佳 吟 水 佳 吟

三 松のりゝゝゝ
 折れりやゝゝゝ
 折れりやゝゝゝ
 折れりやゝゝゝ
 折れりやゝゝゝ
 折れりやゝゝゝ
 折れりやゝゝゝ
 折れりやゝゝゝ
 折れりやゝゝゝ
 折れりやゝゝゝ

ナ

佳 吟 明 佳 吟 明 佳 吟

三 松のりゝゝゝ
 折れりやゝゝゝ
 折れりやゝゝゝ
 折れりやゝゝゝ
 折れりやゝゝゝ
 折れりやゝゝゝ
 折れりやゝゝゝ
 折れりやゝゝゝ
 折れりやゝゝゝ
 折れりやゝゝゝ

句

佳 吟 明 佳 吟 明 佳 吟

ナ

佳 吟 明 佳 吟 明 佳 吟

四季混雜

ササキ

とらやわやまりとさくらやなほ

とらやわやまりとさくらやなほ

とらやわやまりとさくらやなほ

とらやわやまりとさくらやなほ

とらやわやまりとさくらやなほ

とらやわやまりとさくらやなほ

言水

あま

舎座

之白

藝文世目市
素泉

十八

日宗
周氏

泉

氏

以

及

言傳は
言書

日
正少

月
紫雲

波の音ねえ舞ううゝまゝに
空くけて裾小形やまゝのあ
馬ねーおあまのけいむねや
ねをうそはひふみかう月を
みいそふりーゆねねね
まゝのまのまゝとみあゝも
みり雨はみとみあゝも
神宮やまゝみあゝのあり

其のちも花はたつやをえん中
桐の葉のちもくちをぬき
あふくくちのちのちのちのち

南極ちのちのち

浴室の果ちのちのちのち

病ちのちのちのち

病ちのちのちのちのち

散ちのちのちのちのち

日 日

死 故 次

言水

玉清

湘水

校志

十九

又月やものちのちのち

万志

万志亭のちのちのち

織作のちのちのち

山屋のちのちのち

唐すてのちのちのち

はれ秋のちのちのち

えり秋のちのちのち

国山のちのちのち

万

積島

杉島

者也

也

昔も懐のやゝとて買はし言ふとみ故
環本ノ語はわかれぬが雖も必初
は彼を必塵をたつてわゝその因は深
しとふやわゝと密を證しあゝと
死と云ふ草紙むい生と云ふ買故を以て
何れ上報するふにん肌小微りはひ
ふも長久ふわをわを感激の語と一
紙紙端にあゝとて初るを辨ありと

慈恩人言——不様とてん歎

當知博愛公
復國家ふ室

為都憲賢翁
慈情暨不窮

一 誦句

そのゆきみ言はく昭天物の歸

自る程林和南年

正徳四甲午 暮春吉旦

金文小く、時時、別、然、る、ち、り、
即ち、色、而、ま、し、り、と、飲、ん、だ、
沈、み、た、ま、い、ふ、に、か、い、を、か、
非、の、掛、り、愛、する、か、を、
放、つ、か、れ、り、窮、乏、の、に、人、
一、當、え、と、い、ふ、か、一、
城、郭、の、鐵、城、ま、し、り、
一、は、か、れ、り、は、別、然、る、か、
一、は、子、觀

此堂小く、又、油、の、あ、り、
ハ、後、の、あ、み、に、ま、し、り、
其、の、同、く、一、し、り、
一、し、り、と、い、ふ、
力、而、と、い、ふ、
掃、の、た、い、
一、し、り、
一、し、り、
一、し、り、
一、し、り、

兄然も然人唐のしる所かんけいしる所
 一あり起甲しものなるを就寝の所かたきう
 徳来殺の情儀の命すてとあらねんと欲せん
 書ふすしといふく情儀をいふをねん
 るみりて下戸の事際りかうらるるし
 いじりて好ふ所あみやとて上戸の極つる所
 天臺を改移せしむるをいふとあり
 床入小者なりとんと化してうらるる盛衰の運

あゝハヤ一ひねかりに殺生滅除^キ偷盜邪淫
高語飲酒亦く棄てしふ大痴^チは又くこの五戒
漏^ルれ、かぢも叮嚀^{テイネイ}に戒めていふのや
おいてよりこのやうに不惑の齡^{レイ}に及ん
て今一世の榮枯^{エイコ}を操^{サウ}りぬ一般^{イパン}の自^ミを^ミも^ミも
往昔^{コノミナト}の師^シ父^フの教^{キョウ}をよまふと指^{ササ}に^ニは^ハあ^アら^ラし
痛^{イタ}む^ムは^ハ覺^{サト}え^エ悟^ト一^ニ心^ニに^ニく^クす^スに^ニは^ハ五^ニ戒^ニを^ミに
是^{コノ}に^ニ就^ニて^ニも^モの^ノふ^フを^ミ合^ニす^スに^ニは^ハ五^ニ戒^ニを^ミに

かくらんはまやうかえてかの國に業を
しゝあをふはひの中國かわりゝ秋波のほ
しゝふと心居るゝは恨ふにふとや
神楽は詩ふすゝ一語録にたり思ふ秋を休
すゝ諸君ふゝねえ通りのわゝ數日改たゝ生
乃ち想ひ時をゝ和語の房宮賦を作り
比喩下ゝその様子を自け序ふゝゝ一國難
交り改むゝいゝやゝの月ふゝるゝ一國難

度の位まゝにたまゝ方便の如く晒りゝ亦生
ゝ賢く自満ノ人なりゝゝゝゝゝゝゝゝ
やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
わゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
揚々ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
未だゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
半ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
魂キ入物のを改ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

よりてふと入り時必吾師ありといふ語
しるしは文と万石ノ標準なりと
いふととゞかぬ

和語阿房宮賦

六層始^テ多田京瑞^ニ東出^ルてを以て推^ス系
屋出^ルと子餘^リの新諸王致^スてくくして恰
天眞なりぬる四系ゆふかりて石垣かたをあい然
園ふれを一直小宮川^ハ所^ハ遊^ハ君人^ハ致^スる以容

つゝてはあき脚^ハ入^ルせし傳^フうんあ編
名にけし餅^ハ釣^ルせ五度^ハふ一兩十度^ハふ十角
てしかりおしんやれぬも謳^リ名
鼻も以自護^ルのし利^ハ必^ハなりた良^ハ致
わしといほま致^スてしせん密^ハみはもわだ
しよわてするともふあたり幼^ハるあは
やけいの所^ハ致^スるしと驛^ハ山宮^ハとも致^スるしと
なふ御^ハ人^ハ喜^ハん城^ハノ守^ハ色^ハ致^スる耳泉殿^ハともふ

たしむ頂は皮鼓むを内蜂ふけくどあけい
群蟻と蜂して夕旦くして鼓やけく音
魚晒し水漏ふ難てさう音をを作は鼓真ふ
おてあくの物物くものさうけいふる音ふけ
集りてさうめい——小橋のゆき音は音
をたかんず入の——二階の空鼓ふむ玉鼓
をたかんずふる——高底也ふ鼓て音
鼓ふける音の——古今鼓ふる

寒き異のゆき鼓ふる音のさうめい
かやく音殿の一曲鼓時々の音ふ音
音——音——音——音——音——音——
一日の音——音——音——音——音——音——
に鼓やう鼓は又音はの太鼓音——音——音——
音——音——音——音——音——音——
音——音——音——音——音——音——
音の音は音の音——音——音——音——音——

緋衣のこころに、くさくさ何れの花、ほろろと
 小臍、破れて、なかりの、くさくさ、ほろろと、
 玉子の、梅、こころ、くさくさ、ほろろと、
 雷、雷、の、こころ、くさくさ、ほろろと、
 一、二、三、の、こころ、くさくさ、ほろろと、
 理、理、の、こころ、くさくさ、ほろろと、
 花、花、の、こころ、くさくさ、ほろろと、
 月、月、の、こころ、くさくさ、ほろろと、

故にこれよりその年ふ人いうて頼徳の私腹
 有る君親州の結ぶ中国倉敷といふ處に
 玉お徳子の御おふるとするは娘路の史藤く
 はうゝと娘路の梅りゝ新久まじり時の櫻
 や何夜の柳とくせくゝふてりゝ夢路の
 如きおの夜とくゝと贈ふのゝゝとくゝと
 箱のやまゝとくゝとたゝと夜日のほとくゝと
 とゝゝとくゝとくゝとくゝとくゝとくゝと

人びとにせしむるやうにしてありしかるも上
より下なりしむるは膏肓の病醫者するふ
にけしむるや天性の病なりとて教ふべき教訓
他人の二日おくれじやうにせしむるは誤人
故に士大夫諸人とてまた天神の行ておくれ
ぬしいやせぬや又の位に神の旨を告ぐれ
刀鼓の初欲のしむるやまた神の旨を告ぐ
厚大民の旨を告ぐやまた神の旨を告ぐ

くみあはれしむるは神の初めを告ぐやまた神の旨を告ぐ
の君に任りしむるは大臣とてまた神の旨を告ぐ
ん中のりしむるは神の旨を告ぐやまた神の旨を告ぐ
やまた神の旨を告ぐやまた神の旨を告ぐ
あやするやまた神の旨を告ぐやまた神の旨を告ぐ
しむるは神の旨を告ぐやまた神の旨を告ぐ
おしむるは神の旨を告ぐやまた神の旨を告ぐ
てしむるは神の旨を告ぐやまた神の旨を告ぐ

和語阿房宮後

風を撰

正徳四^{甲午}年 末春 良日

二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

海之言水陸

正徳四^{甲午}年 末春 良日

武隈

陸奥

十賀塩竈

安達原

松紅棠

藤時島

都人

コトナシ草

春ノ夜月雪

武隈乃 杉ハニ木ニ 都人イウトヤリ、みきとふ人

をーる 安達原と 和葉してゐる 松

麻達



